

## 混浴の歴史

### 混浴に対する複雑な気持ち

江戸（現在の東京）における混浴は「風紀を乱す」として度々法律で規制する取り組みが行われたものの、明治時代（1868-1912）が始まるまで、日本の銭湯や温泉の多くは混浴でした。男女が一緒に入浴する光景は、19世紀半ばに初めて日本を訪れた、性的な慎みを重んじるとともに他国にも自分たちの基準を押し付けたがる西洋人にとって、大変な衝撃でした。

フランシス・L・ホークスが1856年に書いた、1850年代初頭のアメリカ海軍提督マシュー・ペリーの日本遠征に関する記述の一節を見てみましょう：

銭湯のひとつで見られた男女が裸であることを意識せずに入り乱れている光景は、アメリカ人にこの国の住民の道徳観に対する好意的な印象を与えるものではなかった。これは日本全国共通の習慣ではないかもしれず、実際、我々に身近な日本人はそうではないと言うが、日本の下層階級の人々は、東洋のほとんどの国々より道徳的に優れているにもかかわらず、紛れもなく淫らな人々である。[1]

ホークスの本の初期の版には、ウィリアム・ハイネによる男女と子供が一緒に入浴している日本の銭湯のイラストも掲載されていました。これはアメリカの読者にとって不届き至極だったため、後の版では削

除されました！

来日した外国人は、混浴を日本文化全体の性的な奔放さと同一視することが多かったため、日本人の入浴習慣を否定的に見る傾向がありました。1860年に日本を訪れたイギリス人エドワード・バリントン・ド・フォンブランクは、日本人を「あらゆる意味で下劣で好色で猥褻」と評し、「本や絵の中だけでなく、磁器に描かれ、漆器に箔押しされ、象牙に彫られ、扇に密かに込められたふしだらなもの」について読者に警告しています。

「文明的な」西洋列強から対等に見られようと必死だった明治政府は、1869年2月、都市部での混浴を禁止しました。現在でも、混浴の営業が許されているのはこの禁止措置以前からある混浴風呂のみで、新たに混浴風呂を開設することは認められていません。

なぜ混浴という誹謗された文化が東北で存続し、繁栄したのでしょうか。複数の理由がありますが、それらには例えば、自然湧出する温泉の数が限られていたこと（つまり男女で同じ風呂を使った方が資源を有効利用できる）や、気取らない農民の家族が毎年同じ温泉を訪れたり、性別を問わず健康なものが病気の家族の入浴を介助していたりといった社会的な文脈が挙げられます。しかし、やはり最大の理由はこの地域がきわめて辺鄙な場所だったことでしょう。第二次世界大戦後まで、地域外から十和田八幡平、特に八幡平地域を訪れるのは容易ではなく、多くの温泉地へのアクセスは徒歩か馬に限られていました。最初に道路が整備されたのは1960年代で、新幹線は1982年によりやく

盛岡市の近くまで開通しました。

---

[1] Francis L. Hawks, *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, Performed in the Years 1852, 1853, and 1854 under the Command of Commodore M.C. Perry, United States Navy*. New York: D. Appleton and Co., 1856)

[2 Edward Barrington de Fonblanque, *Nippon and Pe-che-li; or, Two Years in Japan and Northern China*. London: Saunders, Otley and Co., 1863]